

留学生相談部門

留学生相談部門の活動対象は、1) 一橋大学に在籍する留学生、2) 留学生の支援や交流を希望する日本人学生、3) 留学を希望する日本人学生、及び4) 留学生の問題を解決するために連携する教職員や地域社会の人々である。2001年度の留学生相談部門の業務は、留学生相談部門教官（横田雅弘）と留学生センター兼務で各研究科に所属する留学生専門教育教官（商学研究科：岡野宏次、経済学研究科：藤井美智子、法学研究科：水野治久、社会学研究科：河野理恵）が担当した。

留学生相談部門が提供する教育サービスは、1) 学生の相談に応じ、問題解決を図る「相談活動」と、2) 学生の適応上の問題を未然に防いだり、異なる文化への認識を高めていく「予防・開発的活動」の二つに分けられる。相談活動の中心は、カウンセリングである。カウンセリングには、治療的な面接から情報提供まで幅広い活動が含まれる。予防・開発的活動には、a)オリエンテーション・プログラムやチューター制度などの留学生の異文化不適応を予防する活動、b)見学旅行、授業など、留学生の日本文化や社会への理解を促す活動、c)コミュニティによる生活支援を促進する活動、d)学生国際交流誌『Bridges』の編集、日本人学生のための留学フェアの開催など、日本人学生や教職員に異文化交流の意義を訴えていく活動がある。

1. 相談活動

1) 相談室の開室期間、時間及び担当者

夏学期（3月26日～7月31日）及び冬学期（9月25日～2月15日）の月曜日～金曜日の午前10時～午後1時、午後2時～午後5時に留学生相談室を開室した。なお、長期休暇中は相談室を閉室したが、相談担当者の研究室で相談を受け付けた。表1は相談室担当者の一覧である。

表1 相談室担当者の一覧

曜日	10時～13時、14時～17時
月	横田雅弘
火	水野治久
水	岡野宏次
木	河野理恵
金	藤井美智子

表2 2001年度の月別の来談状況

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	件数	構成比(%)
1言語	3	3	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	10件6名	0.81
2修学	53	27	28	17	1	4	27	26	22	26	7	18	256件235名	20.78
3経済	54	13	38	20	0	7	67	8	13	7	2	4	233件204名	18.91
4推薦状	6	13	0	0	0	0	13	4	5	0	0	1	42件37名	3.41
5オリエンテーション	17	2	0	2	0	0	6	0	0	0	0	1	28件28名	2.27
6フューチャー・リ	36	46	20	4	0	0	22	10	6	0	0	0	144件144名	11.69
7人間関係	2	8	1	3	0	1	2	2	5	1	2	4	31件26名	2.52
8健康	4	2	20	11	6	20	17	6	12	9	3	13	123件69名	9.98
9行事	0	0	2	12	0	0	0	1	1	32	9	0	57件57名	4.63
10在留資格	1	0	5	2	0	0	0	1	2	0	0	0	11件10名	0.89
11留学相談	3	1	3	5	0	0	4	0	0	7	2	0	25件24名	2.03
12ブリッジズ	10	18	1	13	0	1	8	4	7	4	0	0	66件50名	5.36
13生活	7	10	6	7	0	1	6	2	7	5	5	2	58件35名	4.71
14その他	15	22	9	10	0	12	16	19	11	16	12	6	148件115名	12.01
合計	211	165	134	107	7	46	188	83	92	108	42	49	1232件1040名	100.00

2) 来談状況の分類

表2は2001年度の来談状況の分類である。一年間で1232件の相談(1040名)を受け付けた(2000年度は1102件934名)。来談者の内訳は、1232件中、留学生からの相談は814件(66.07%)、日本人学生からの相談は239件(19.40%)、教職員からの相談は133件(10.80%)、学外からの相談は46件(3.73%)であった。昨年度に比べて、教職員からの相談件数が増加しているが(昨年度87件)、これは特定の留学生のケースにあたって頻繁に連携をとったことが原因である。

① 相談領域

相談が一番多かった領域は修学の問題(20.78%)である。ここには、履修科目の選び方、履修手続き上の問題、勉強の方法、進路・進学相談が含まれる。履修科目の選び方や手続きの相談は情報提供としての側面が強いが、進路・進学相談の中には、体調等の不良から修士論文の執筆に困難を抱えたケース、あるいは修士論文の執筆を断念したケースなどが含まれる。

次に多かったのは経済の問題(18.91%)である。これには、奨学金のための推薦状執筆の依頼、アルバイトのための副申書の記入、経済的困窮度の高い学生からの相談が含ま

れる。2000年度に引き続き、2001年度も奨学金や授業料減免の不採用者からの相談が目立った。入学金の免除申請をしていた新入留学生が7月になって免除不可を知らされ、大変困難な状況に陥った事例が複数あった。このような場合は、その学生と一緒に生活設計を考え、他の奨学金受給の可能性を模索しながらアルバイトについても考え、勉学とアルバイトをどのように両立させていくかを検討することになるが、大変厳しい。

三番目に多かった相談領域はチューターに対するオリエンテーション（11.69%）である。このオリエンテーションは、チューター学生と留学生のトラブルを防止するために行っているものである。オリエンテーションでは、チュートリアル内容の確認、チュートリアル実施にあたっての注意事項、問題が起きた場合の対処などについて確認している。2001年度には100組のチューターと留学生にオリエンテーションを実施した。

四番目は健康の問題（9.98%）であり、これには身体的な問題だけでなく心理的な問題も含まれる。2000年度に比べて全体に占める割合は倍増している。その主な理由は、長期にわたって頻繁に相談にあたったケースが複数あったためである。これらのケースでは、保健管理センターの医師や指導教官等との連携が行われた。また、相談件数に占める割合は少ないものの、人間関係（2.52%）に関する相談も認められた。人間関係の問題には心理的な健康の問題を内包しているものも多く、日本人との関係では異文化不適應も関連していることが多い。保健管理センターや他の医療機関に受診しながら来談したり、こちらから受診を勧めるケースも少なくない。留学生の数が増加する中、こうした問題にどのように応えていくかを考えなければならない。

② 相談者の内訳

相談者の44.30%が学部留学生である。学部留学生は日本社会への適応問題とともに、発達的な課題を抱えており、それが、他の身分の来談者数との違いとなって現われてきた可能性がある。今年度は、修士課程の学生の来談が32.89%と2000年度（13.70%）を大きく上回った。これもいくつかの頻繁にかかわった事例があったことが主な原因であるが、それだけでなく、大学院重点化が完了して修士課程の学生数が大きく増加したこともその背景にある。さらに、修士課程の期間は2年間と限られており、奨学金や授業料減免が厳しさを増した中で、単位の修得、修士論文の執筆、卒業後の進路と数多くの課題をこなす必要がある。

研究生は8.64%で、来談者に占める割合はそれほど大きくないが、修士課程や博士課程の入学準備期である研究生の訴える問題は深刻なものが多い。

日本人学生の来談者は、昨年度より増加し、本年度も19.40%を占める。チューター・オリエンテーションの充実とブリッジズやASSISTに関わる日本人学生の増加、日本人学生の海外留学に関する相談の増加も背景にある。

なお、相談室には留学生、日本人学生の他に、教職員（133件：10.80%）と学外（46

件：3.73％）からの相談があった。教職員は昨年度の87件に比べて大きく増加しているが、これは前述したように留学生の問題で教職員（保健管理センター医師、指導教官、留学生課職員等）と頻りに連携をとったケースがあったためである。加えて、留学生への対応に関する教職員からの相談もあった。また、学外からの相談は、地域で留学生を支援しているボランティア、国立市行政の担当者などからである。

③ 相談の時期

相談の時期をみると、4月（211件：17.13％）、10月（188件：15.26％）、5月（165件：13.39％）に相談が多い。この時期は、入学したばかりの新入留学生や新学期を迎えた留学生からの相談が集中する。しかし、これまでは4月と10月にかなりの集中が見られたが、今年度は6月（134件：10.88％）、7月（107件：8.69％）1月（108件：8.77％）と100件を超える月が多かった。相談件数が少ないのは8月（7件：0.57％）、9月（46件：3.73％）の夏期休暇中、2月（42件：3.41％）、3月（49件：3.98％）の春期休暇中である。休暇中、相談室はほとんど閉室されているが、それにもかかわらず研究室相談に来室するケースは、帰国や進学、卒業の問題に関連した相談をはじめ、ときに深刻なものもある。こうした学生の問題に効果的にケアしていくためには、問題が深刻化しない段階で発見したり、問題を予防する活動の充実が必要である。

2. 予防・開発的活動

1) オリエンテーション・プログラム

4月及び10月入学の学部生、研究生、交流学生、日本語研修生を対象にオリエンテーションを行った。なお、オリエンテーションに欠席した留学生については留学生相談室で個別にオリエンテーションを実施した。個別のオリエンテーションを受けた留学生は28名である。

2) 学内異文化交流誌『Bridges』

『Bridges』15号（編集長：横田）及び16号（編集長：河野）を編集した。15号より表紙のデザインが変更された。15号の特集は「21世紀に橋を架ける」で、21世紀の一橋大学のビジョンとこれからの学生像を検討した。16号の特集は「中国・韓国・日本の教科書比較」ならびに「留学」をとりあげた。ゼミナール特集は阿久津ゼミナールであった。

3) 学内留学フェア

日本人留学希望者へのガイダンス及び協定校紹介を目的とした留学フェアを5月23日（水）に学内において実施し、約80名の日本人学生が参加した。交流協定校の紹介は交

留学生及び帰国留学生が担当した。なお、学外から HEC 経営大学院日本事務局太田垣みどり氏、カリフォルニア大学東京スタディセンター梶晶子氏を講師として招いた。

4) 国際資料室のチューター

個別チューターとは別に、全ての留学生が気軽に日本語のチェックや講義内容の疑問点などを相談できるように、国際研究館1階の国際資料室にチューターが常駐した。チューターには各研究科の大学院生を依頼し、月曜日から金曜日の10時から1時、2時から5時まで、留学生や日本人学生からの相談を受け付けた。

5) 留学生日本探訪旅行

2泊3日の「留学生日本探訪旅行」を企画・実施した。8月に新潟・佐渡（20名参加・引率者：横田）、9月に京都・大阪（20名参加・引率者：河野）、2月には広島（20名参加・引率者：岡野）、平泉・松島（19名参加・引率者：藤井）、京都・大阪（20名参加・引率者：河野）、3月には、京都（20名参加・引率者：水野）、広島（15名参加・引率者：横田）を実施した。

6) く に たち 地 域 国 際 交 流 ネット ワーク と の 協 力

「く に たち 地 域 国 際 交 流 ネット ワーク」が実施している外国人のためのサポート活動（日本語講座、ホームステイ・プログラム、生活相談等）に協力した。

7) 授 業

相談部門にかかわる教官が担当した授業は以下の通りである。

① 日本語研修コース

科目名（担当者）	コマ数	対象	授業内容	時期・時間数
日本の社会と文化～異文化発見ゼミナール～ (横田・水野)	2コマ/週	日本語研修生	講義や体験学習、見学などを通して日本社会の理解を深め、あわせて日本文化への適応スキルを習得する。	4月コース 10月コース 各64時間

② 教養教育科目

科目名(担当者)	コマ数	対象	授業内容	時期・時間数
外国人留学生社会科学ゼミナールⅠ(水野)	1コマ/週	学部1・2年の留学生	一橋論叢の新生特集号(4月号)、『知の技法』(東京大学出版会)などを輪読し、社会科学を学ぶ意味とその方法を考える。読解力を養うために輪読した論文を要約する。	夏学期開講 30時間
外国人留学生社会科学ゼミナールⅡ(水野)	1コマ/週	学部1・2年の留学生	4名程度のグループに分かれ、日本人や日本社会に対する研究テーマを設定し、調査を実施する。この体験を通して、データのまとめ方、発表の方法等を学習する。	冬学期開講 30時間

③ 学部教育科目

科目名(担当者)	コマ数	対象	授業内容	時期・時間数
商学部 比較文化経験論Ⅰ (横田)	1コマ/週	主に学部生	「偏見の心理」と「差別の心的世界」のテキストをグループKJ法を用いてまとめ、発表する。	夏学期開講 30時間
商学部 比較文化経験論Ⅱ (横田)	1コマ/週	主に学部生	自分にとって異文化である対象と接触し、その体験を異文化理解ワークショップに組み立てて実施する。	冬学期開講 30時間

商学部 日本文化と人間関係Ⅰ (英語による講義) (岡野)	1コマ/週	主に学部留学生	バイリンガリズム、バイカルチュラリズム、帰国子女、言葉と人間関係、人間関係のパターンなどについて資料を読み、日本での経験を踏まえてディスカッションをし、タームペーパーを書く。	冬学期開講 30時間
商学部 日本文化と人間関係Ⅱ (英語による講義) (岡野)	1コマ/週	主に学部留学生	言葉と自己、自己概念の形成、自己と他者の関係、独立自己と相互依存自己、ワークグループ、モチベーションなどについて資料を読み、日本での経験を踏まえて、ディスカッションをし、タームペーパーを書く。	冬学期開講 30時間

留学生相談部門

経済学部 社会科学の学習法 (藤井)	1コマ/週	主に学部 1、2年の留 学生	最近の社会・経済問題の中から興味がある トピックを選択し、文献資料の検索、レポ ートの書き方等を学習する。	冬学期開講 30時間
社会学部 社会・人文の日本語Ⅱ (河野)	1コマ/週	主に学部 2年生以 上の留学 生	留学生センターが独自に作成したテキス ト、『社会科学への道しるべ』を精読する。 それによって論文特有の表現を理解し、内 容を的確に理解する。また、各分野におけ る主要な概念や、論じられている事柄の背 景について基礎的な知識を学ぶ。	冬学期開講 30時間

④ 大学院科目（社会学研究科）

科目名（担当者）	コマ数	対象	授業内容	時期・ 時間数
総合社会科学日本事情（河野）	1コマ/週	主に修士 1年生の 留学生	特定の「日本人論」を取り上げ紹介するの ではなく、さまざまな「日本人論」「日本 文化論」をとりあげる。そしてそれらを自 分の身のまわりの日常レベルから再検証 してみたり、また批判的に考察する。参加 者には自分なりの「日本人論」を考えても らいたい。	夏学期開講 30時間

（文責：横田雅弘／集計は相談部門担当の4教官による）